



TITLE:

脳膜脳脱を思わせた後頭部血管腫 の1例(症例)

AUTHOR(S):

越, 哲也

CITATION:

越, 哲也. 脳膜脳脱を思わせた後頭部血管腫の1例(症例). 日本外科宝函
1958, 27(5): 1237-1239

ISSUE DATE:

1958-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/206685>

RIGHT:

症 例

脳膜脳脱を思わせた後頭部血管腫の1例

京都大学医学部外科学教室第1講座（指導：荒木千里教授）

越 哲 也

〔原稿受付 昭和33年6月9日〕

OCCIPITAL HEMANGIOMA SIMULATING MENINGOENCEPHALOCELE

by

TETSUYA KOSHI

From the 1st Surgical Division, Kyoto University Medical School
(Director : Prof. Dr. CHISATO ARAKI)

A case is presented in whom meningoencephalocele was suspected before operation, but a hemangioma cavernosum was found at operation which was connected with vessels in the cranial bone or in the intracranial space.

Case. 2 year-old male. At the birth a tumor of thumb-tip-size had already been noticed in the right occipital region. It gradually enlarged and was of walnut-size when the patient was admitted. Neither abnormal coloration of the covering skin, dilatation of veins, nor pulsation was observed. The consistency of the tumor was elastic, soft, and undulating. When the patient was crying, the consistency became tense and elastic. The border of the tumor was sharp and, under the tumor a circumscribed depression of the skull was observed. Though the skin over the tumor was movable, the tumor was tightly fixed with the basal tissue. The tumor was diaphanoscopically opaque.

From these findings a congenital meningoencephalocele from the right sutura lambdoidea was suspected. The operation disclosed a hemangioma in which more than ten thin vessels were found to be penetrating the cranial bone. It was histologically hemangioma cavernosum.

ま え が き

術前、後頭部に於ける先天性の脳膜脳脱と思ひ手術した所、頭蓋骨、或は頭蓋内部とつらなつてゐる海綿様血管腫であつた1例を経験したので、その概要を報告し、若干の考察を加えてみた。

症 例

満2才の男児。

主訴：後頭部に於ける無痛性の腫瘤。

既往歴及び家族歴：特記すべきものはない。

現病歴：母体は初産婦であつたが、10ヵ月頗る安産で生れた。産湯をつかわせる折、既に後頭部の少々右側に、拇指頭大の腫脹があるのに氣附いていたが、分娩時よくある頭血腫であらうと思ひ放置しておつた所が一向に消退せず、その後特にその部を強く打つた様

な事もなかつたが、漸次増大し、入院時、胡桃大となつた。且、泣くとその腫瘤は非常に緊張して大きくなつて来る。今までその被覆皮膚の異常着色については別に気付いていない。現在まで發育は頗る順調で、知能程度も亦普通である。

入院時所見：栄養状態頗る良好で、胸腹部に病的所見なく、神経学的に何等の異常所見を認めない。頭部の大きさは正常で毛髪も良好である。左上膊部に $1 \times 1.5\text{cm}$ の色素性母斑を認め、又軀幹に、ホクロを稍々多数認めている。小顎門及び大顎門は既に閉鎖している。後頭部の稍々右側、即ち後頭結節の右上方に、胡桃大の半球状の腫瘤を認める。被覆皮膚の異常着色、静脈怒張、搏動等は認めない。触診するに、局所体温上昇は立証しない。腫瘤は弾力性軟で波動を証明する。且、泣くと緊満弾性となつてくる。境界は明らかでその部の頭蓋骨の陥凹を認めるが、骨欠損の存在は明らかではない。皮膚は腫瘤と容易に移動し、亦腫瘤は基底組織と、かたく癒着している。圧縮性を明らかに認める。透光検査では光を通さない。

血液所見、赤血球数415万、血色素82%、白血球数7600。(中性球51%、淋巴球42%、大単核及移行型7%)。

尿検査で異常を認めない。

以上の所見からして、右三角縫合部より生じた先天性脳膜脳脱であると診断した。

手術所見及び経過：腫瘤の周囲に茎を右側上方に向けた半月形の皮膚切開を行い、皮膚及び帽状腱膜を翻転した所、骨膜に被われ藍紫色の胡桃大の腫瘤を認めた。即ち之は脳膜脳脱ではなく、血管腫である事が判明した。腫瘤の全周にわたり、円形に骨膜に切開を加え、腫瘤の基部と頭蓋骨との癒着を剝離した所、その部の頭蓋骨は扁平に陥凹して居り稍々右上方より左下方に、斜に約3cmの長さにわたつて、点々と10数箇の細い血管が頭蓋骨をつらぬいて血管腫とつらなつておつた。それをすべて切離して、腫瘤を剔出した後点状となつて出血して居る部分を、骨蠟によつて止血し、ペニシリン20万単位注入し皮膚縫合を行い手術を終わった。

組織学的には定型的な海綿様血管腫であつた。(附図1)

術後 翌日約8cc. 2日目、3cc. 3日目2cc. 4日目、1cc. と血液を同部より穿刺排除した。以後は血液の貯溜を認めず第1期癒合を手術後8日目に元気に退院した。

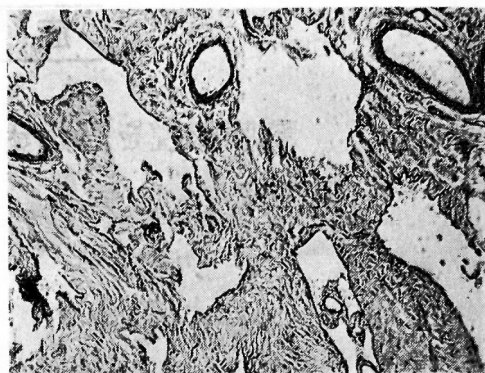


図 1

考 察

脳脱とは、頭蓋骨の裂隙を通じ一部脱出した頭蓋内腔が軟性頭蓋被膜下に於て形成した腫瘍を総称し、その脱出頭蓋内容が脳膜丈であつて内に脳脊髄液を容有する場合に脳膜脱と呼んでいる。尚之は先天性と後天性とに区別される。

先天性脳膜脱の発生頻度は3000~6000の初生児に1人の割合にみられると云われているが、そのものが先天性發育異常に基く畸型であるために、その多くは胎生時又は分娩時乃至出生後間もなく死亡するのが多い。亦発生部位により出現の頻度を異にする。即ちその腫瘤は頭蓋骨の正中線上に位するもの最も多く、殊に之が後頭部(53~70%)次いで前頭部(17~23%)で他の部分に発生する事は一般に稀である。尚後頭部に於けるものでは、小脳天幕、従つて後頭結節を境界として、それよりも上方に発生するものと、下方に発生するものとが区別され、前者ではヘルニア門は屢々小顎門に合流する事があり、後者ではヘルニア門は太後頭孔と連合する事もある。京都大学外科学第1講座に於て、最近15年間に頭部に於ける先天性脳脱を10例経験しているが、その中、後頭部8例、頭頂部1例、前頭部1例で、後頭部の1例右側にあつた症例以外すべて頭蓋の正中線上に存在しておつた。尚、後頭部脳膜脳脱に見られる特有な頭蓋の変形は、横径の短縮と長径の延長、即ち長頭顱である。之は腫瘤が後頭部にあるために頭部が常に横向に支えられる結果、生ずる所の変形である云う。本症例に於ては特にかゝる変化は認めていない。

即ち本症例は正中線上ではなく、後頭結節より右上方の脳膜脳脱と臨床所見から考えられた。手術の結果、海綿様血管腫であつたのである。

血管腫は血管に関連した間葉性の先天性腫瘍であるので従つてあらゆる臓器及び組織に発生する腫瘍であるが、然し体表の皮膚に発生するもの以外は比較的少ないのである。今皮膚に発生する血管腫について試みに観察してみると、部位別に比較すると顔面次いで頭部に圧倒的に多く、軀幹、四肢がそれについている。即ち Kramer は顔面42%、頭部10%、Weinlechner は顔面頭部71%、黒田は顔面71.2%、頭部5.6%の好発率をあげて居る。性別についてみると女が男の2倍であつてこれは矢張り女に美容的関心が高いためと思われる。初診年齢はこの疾患は勿論、先天的のものであるので、1~2才に圧倒的に多く、亦思春期に多く外来を訪れる様な統計が出ている。血管腫の思春期発現を論じた人も多くあるが、之も矢張り美容的関係からと思われる。尚、後頭部血管腫としては Unna の母斑なるものがあり、之は注意して観察すると成人の5~20%に見られるとさえ云われている。即ち血管腫は頭部の皮膚より発生するものが比較的多くみられ、之は普通一見して容易に診断出来るものである。本症例は皮膚の血管に関連せるものではなく、頭蓋骨又は頭蓋内部の血管と関連を有していた血管腫で、極めて稀なものであつた。

且帽状腱膜及び骨膜の下深くあつたため、被覆皮膚が常態を保つていたため診断が困難であつたのである。

む す び

私は術前、右後頭部脳膜脳脱を思惟したもの、頭蓋骨或は頭蓋内郭とつらなつて居る海綿様血管腫であつた珍らしい1例を報告し、いささか考察を行つた。

(稿を終るに臨み、御指導と御校閲を賜つた恩師荒木千里教授に深甚なる謝意を表する。)

引用文献

- 1) 浅野：先天性脳脱の5例。脳と神経，1，206，1949。
- 2) 北川，上田：所謂仮性脳膜ヘルニアの状態を呈せる囊胞性脳膜脳ヘルニアの1例。京都医学雑誌，38，842，1941。
- 3) 黒田，土屋，古沢：統計的にみた血管腫の検討。皮膚と泌尿，13，380，1951。
- 4) 則武：右側頸部海綿様血管腫の1例。外科宝函，15，968，1938。
- 5) 牛島：頭蓋内に浸入発育せる毛細管拡張性血管腫に対する興味ある手術的侵襲。日外雑誌，43，1508，1943。
- 6) 友岡：海綿様血管腫の治験例。臨床，9，79，1940。
- 7) 若林：血管腫と色素性母斑の合併症例。皮泌雑誌，47，336，1932。
- 8) 山田：血管腫発生機転に関する考察。皮泌雑誌，38，123，1940。

von Recklinghausen 病と聴神経 Neurinoma, 前頭葉 Meningioma とが合併せる 1 例

京都大学医学部外科学教室第1講座(指導：荒木千里教授)

今 井 敏 彦

〔受稿受付 昭和33年6月9日〕

VON RECKLINGHAUSEN'S DISEASE ASSOCIATED WITH BOTH ACOUSTIC NEURINOMA AND FRONTAL PARASAGITTAL MENINGIOMA. REPORT OF A CASE.

by

TOSHIHIKO IMAI

From the 1st Surgical Division, Kyoto University Medical School
(Director: Prof. Dr. CHISATO ARAKI)

A 19 year-old female.